

フジカルインテンシティ 97-'98 season 村上龍

ryu Murakami Physical Intensity '97-'98 season
ウル、ジヨホールバル、トゥールーズ、ナント、リヨン、ペルージュ



フィジカル・インテンシティ'97-'98 season 村上 龍

Ryu Murakami Physical Intensity '97-'98 season Seoul, JohorBaharu, Toulouse, Nantes, Lyon, Perugia
ソウル、ジョホールバル、トゥールーズ、ナント、リヨン、ペルージャ

光文社

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽一―一六―六

(T112-8011)

光文社 文芸編集部

フィジカル・インテンシティ'97-'98 season

1998年12月20日 初版1刷発行

著者	村 上 龍
発行者	濱 井 武
印刷所	公 和 図 書
製本所	ナ シ ョ ナ ル 製 本

発 行 所 東京都文京区音羽 1 株式会社 光 文 社

振替 00160-3-115347
電話 編集部 03(5395)8174
販売部 03(5395)8112
業務部 03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。

© Ryu Murakami 1998

ISBN4-334-97201-2

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

フィジカル・インテンシティ '97-'98 season

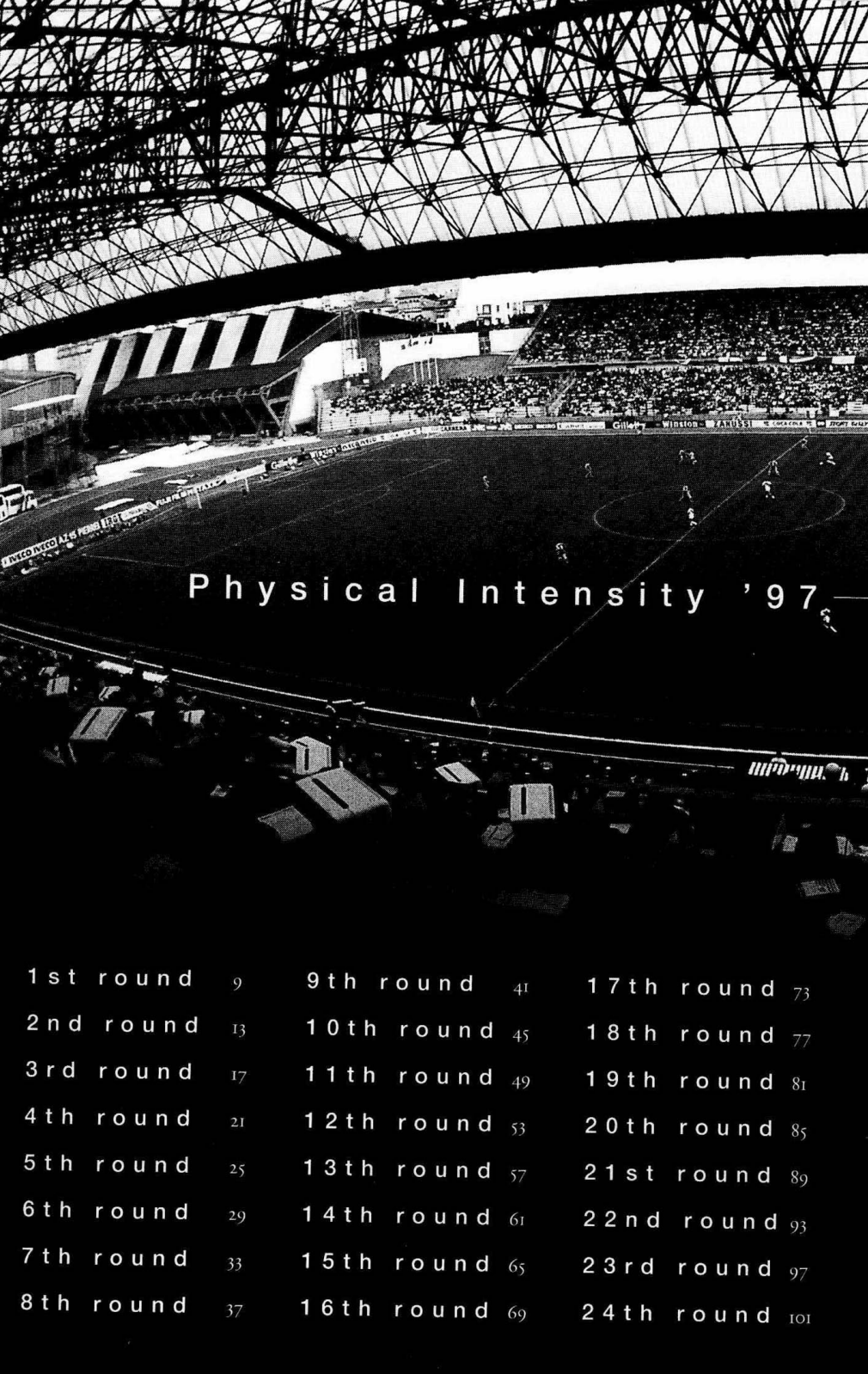


目次



'98 season contents

25th round	105	33rd round	144	41st round	183
26th round	109	34th round	149	42nd round	187
27th round	113	35th round	155	43rd round	191
28th round	117	36th round	161	44th round	195
29th round	125	37th round	167	45th round	202
30th round	129	38th round	171	46th round	208
31st round	133	39th round	175	47th round	214
32nd round	137	40th round	179	48th round	218

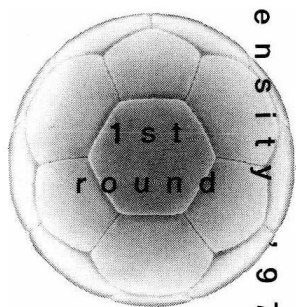


Physical Intensity '97

1st round	9	9th round	41	17th round	73
2nd round	13	10th round	45	18th round	77
3rd round	17	11th round	49	19th round	81
4th round	21	12th round	53	20th round	85
5th round	25	13th round	57	21st round	89
6th round	29	14th round	61	22nd round	93
7th round	33	15th round	65	23rd round	97
8th round	37	16th round	69	24th round	101

フィジカル・インテンシティ '97-'98 season

昔、ニューヨークのホテルのテレビでNFLを見ているとき、あるチームのランニングバックを評して、彼のランにはインテンシティがある、という風に解説者が言っていた。インテンシティには、強度とか強さ、強烈さ、鮮やかさ、といった意味があるが、それはたとえばヘラクルスのような強さではない。恒常的な強さではなく、スポーツなどで発揮される瞬間的な肉体の強度のことだ。



今はまだ、日本サッカーがフランスに行くのかどうかはつきりしない。この原稿が活字になる頃には、確定しているだろうか？ UAEに負ければ、ほぼ絶望的になるわけだが、わたしはどうも今回は予選を突破しそうな気がする。ウズベキスタン戦の後半を見ていてそう思った。韓国戦終了間際の二失点で、日本チームはいろいろな意味でずたずたになった。その責任の大半は前監督にあるが、今そういうことを言ってもしょうがない。ただ、今回のサッカー協会のドタバタ劇を見ると、この国の組織運営・決定の仕方・危

機感のなさ・信じがたい無知さは太平洋戦争の頃から何も変わっていないのだな、と思う。

予選リーグの間にチームがガタガタになるのはそう珍しいことではない。もともとサッカーというスポーツは、十一人という決して少なくない人数で戦われ、アメリカンフットボールやラグビーのように各ポジションが限定されていない。各プレーヤーは有機的で緩やかな関係性で結ばれているから、連係が一度悪化すると、それを立て直すのは非常にむずかしい。選手の運動量を無視してゾーンプレスという考え方が成立するかどうかは別にして、日本のチームは前監督の無知な消極性により、ライン・戦線を押し上げることが忘れてしまった。ただひたすらミスを恐れるようになったのだ。

ワールドカップの決勝トーナメント、一点負けていて残り時間が十分を切ったチームの選手は、ものすごい顔をしている。神経はとくに切れていて、体力も底をついているのに、極端にいうと足がけいれんを起こしていてもそれに気づかずボールを追ったりする。神経が切れているというのは、アホになっているということではない。自意識が切れるほどの集中というのは、覚醒の極致でもあって、神がかり的なことがよく起こるのはそういうときだ。意識でもからだでもなく、細胞が勝利を欲しているというような状態だが、重要な局面でそういう状態が発生しないとサッカーでは勝てない。

ウズベキスタン戦の後半では、そういう状態の萌芽のようなものがあつたと思う。まだ

切実さが空回りしていて、表面に現れていたのはスローインのボールを早く寄せと怒鳴るくらいのことだったが、それでも何かが起こっていた。だからあんなでたらめなゴールが生まれたのだ。

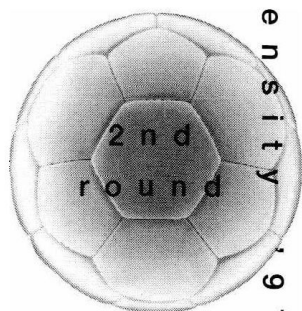
どうしてこの国のメディアは、「自力での」二位の可能性がなくなった、などと言うのだろうか。自分に起こりうることは他者にも起こりうるという当たり前のことが理解されていない。この現実の世界には自力と他力の二つだけがあるわけではない。自分たちは他者に影響を与え、他者は自分たちに関与している。韓国に負けたあと、こうなれば残り五戦全勝するしかない、と前の戦争の司令官みたいなことを言っている協会関係者がいてわたしは驚いた。どういう風にして五戦全体を考えろというのだろうか。最初の一戦に全力を注ぐべきなのであって、全体のことを話題にすると焦点が曖昧になってしまう。五戦全勝しかない、という発言は、決してチームのためにならない。そういう幼稚園児でもわかることを平気で言うのは、その発言が選手達にはなく「世間」に対してなされているからだ。

「一人一殺の精神を持って敵戦力を撃滅せよ」のような命令と変わるところがない。威勢はいいが、具体的なアドバイスが何もない。

わたしは日本はワールドカップには行かないほうがいいと思っていた。日本人はサッカー

ーを本当に必要としていないように思えて、Jリーグにしても一度つぶれたほうがいいと考えていた。Jリーグは、ファクションとして、ブームとして誕生した。だから廃れるのも早い。日本が出場しなくてもワールドカップは充分に楽しめる。

だが途中から考えを変えた。これで、日本がフランスに行けなくて、二〇〇二年を迎えたとき、ワールドカップの価値はこの国でさらに低くなるだろう。ものすごい苦労をして、泥仕合を続けた果てにフランスへ行き、南米やヨーロッパのチームにボロ負けするところを見せて欲しい。フランスに行かなければ、世界との距離もわからない。



この原稿が活字になる頃には、日本のW杯予選突破の可否がはっきりしていることだろう。わたしはUAEには勝つだろうと思っていた。中東の国の選手達は、本当にサッカーが好きだとは思えないところがある。彼らのホームの試合の観客も少ないし、サッカーが好きなのは一部の権力者・支配者層、つまり王族だけだ。あんなに暑いところでサッカーが国民的スポーツになるとはとても思えない。砂漠のオアシスで子どもたちがボールを蹴って遊んでいるところを想像するのはむずかしい。

だが、そういう相手に日本はホームで引き分けた。怒ったファンが試合後に暴れたそうだ。暴れたって試合結果が変わるわけではないのに、ファン達は日本の代表選手がふがないと思ったのだろうか。日本サッカーの実力はあれくらいで、それほど悪い試合ではなかった。加茂前監督になってから日本代表が戦ってきたのはほとんどエキジビションマッチだった。いわゆる親善試合である。メディアはクロアチアやメキシコといい試合をしたと喜んでいたが、遙か極東の国に親善で来て、死ぬ気でプレーする選手はいない。スポンサーを見つけて外国チームを呼ぶ。ファンもメディアもその親善試合の結果で、日本の実力を過大評価したのだろう。世界を知らないというのは恐ろしいことだ。

わたしはソウルに日韓戦を見に行く。ソウルへ行こうと思ったのは、まず第一にわたしが韓国料理が好きだからだ。今は特にケジャン、ワタリガニの唐辛子味噌漬けがおいしい。わたしはケジャンにはまったく目がなない。一日目にはケジャンと韓国風海鮮料理、二日目には参鶏湯^{サンゲダシ}、三日目には韓国式全席料理、四日目には屋台でドジョウと葱の鍋料理、その間に韓国式の垢すりエステをして、品揃えが評判の韓国のデパートでお買い物、みたいなツアーを企画したら、あつという間に応募が殺到して（殺到といっても五名だが）、ツアーは実現することになった。

わたしの著作は韓国で二十数作が翻訳されている。先月プチュンという地方都市で行わ